「人生の交差点」～無料のタウン誌です。ご自由にどうぞ

2025 年 秋・82 号

信条・世に媚びず　・枠にとらわれず
・言いたいことはハッキリ言おう

発行／馬場 雅夫
FAX：06－7879－6372
〒110-0015
東京都台東区東上野 3-26-10 FC204号
URL：https://lifecrossing.ne.jp/
E-mail：info@lifecrossing.ne.jp

8月15日敗戦から80年の靖国神社（九段）

第一の大鳥居付近で右側に参列者たちが続く。戦争の最大の被害者は戦死した人々である。私たちは亡くなくなった方々の分も平和を築く努力をしなければいけない。時代にかなった平和運動の工夫を。

毎号表紙を飾る写真を募っています。単なる風景ではなくユニークなものを歓迎します。

CONTENTS

世の中・社会・文明・歴史・家族・自分のことを書いています。

視点
想定外を考える
北里大学名誉教授 馬渕 清資…2

第10回 宇宙生命哲学者大いに語る
宇宙開発は地球上の文明の進化のためである
北里環境科学センター名誉顧問 神奈川県相模原市
伊藤 俊洋…3

敗戦の日、靖国神社に行きました
東京 馬場 正雄…4

最後の幕臣「小栗上野介」（中）
2027年NHK大河ドラマ化決定
新潟県三条市 丸山 善三…5

ライン河クルージングの旅
兵庫県在住 重藤 千恵美…6

ジジババたちの山歩き
「山モガボの会」を結成
ライター 清水 久美子…7

極端な応援はマイナスにしかならない
～なぜ気づかないのか～
大阪 貴澄 ハル…8

広島の日、湯崎知事の言葉を噛みしめる
東京 三田 栄考…9

戦後80年の随想
江東市民連合世話人 木庭 みち子…10

「あうん」と「なるほどぉ～」のアイダ
～関係性をあそぶ編集のチカラ～
下編
中小企業家同友会会員 東京 原田 健也…11

帰還せず
東京 荒野の年金生活者 宮内 醉祥…12

二人三脚型の職縁選挙と地方議会
地域づくりボランティア八峰村 村長
信州小海町議員 渡辺 均…13

共命鳥の慚愧の言葉「命は誰のものですか」
真宗大谷派 敦賀市・高雲寺住職
ジェシー釋萌海(しゃくほうかい) …14～15

読者のひろば／余録／編集後記……15

参議院選挙で浮き彫りになった我が国の右傾化
東京 元衆議院議員 初鹿 明博…16

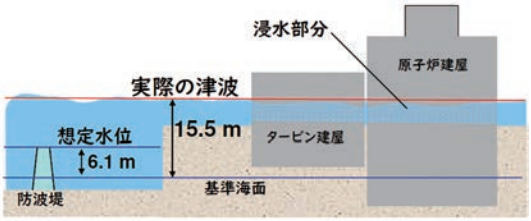
想定外を考える

北里大学名誉教授
馬渕 清資

この6月に、福島第一原子力発電所事故に対する東電旧経営陣の責任を問う、株主代表訴訟の控訴審が結審した。東京高裁は、「巨大津波は想定外だったので、事故は防げなかった。」という被告の主張を支持して、一審で問われた賠償責任を認めない判決を下した。

被災者等による集団訴訟など、他のいくつかの裁判においても、「津波の大きさが想定外」という理由で、国と東電の責任を問われることは一度もなかった。

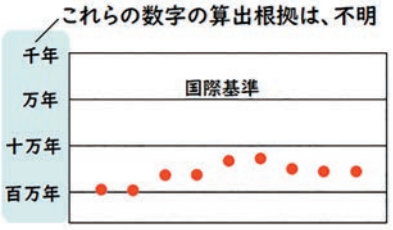
原発事故以前、原子力村の人たちは、「原発は、絶対安全である」と言い切って、いわゆる安全神話を流布していた。そのとき想定されていた津波の大きさは、6・1mだった。そして、実際にやって来た津波の大きさは、その2倍以上、15・5mだった。（原子力安全・保安院資料2016）安全神話の裏で、危険な災害に対する想定がいかに甘かったか。この数字が示している。そして、この甘い想定のおかげで、実際の津波が簡単に「想定外」になり、国と東電の責任が問われなかった。本当の責任は、危険を想定できなかったところにあるのに、なんという欺瞞だろうか。



福島第一原子力発電所に到達した津波の大きさ
（原子力安全・保安院資料 2016）

福島の事故以前に、原発のトラブルは、数多く発生していた。その教訓から、想定を見直す機会はいくらでもあった。特に、炉心隔壁（1994年）、制御棒（2006年）、冷却水配管（2000年）に発生した損傷は、いずれも、深刻な事故につながる可能性があった。それらの損傷が、設備の老朽化に起因することは、明らかだったにもかかわらず、電力会社は、コスト負担を渋って、耐久性の想定を見直すことをしなかった。逆に、福島第一原子力発電所の運転期間を延長する申請を行って、震災事故の2ヶ月前に、十年延長が認可されていた。もし、当初の規制通りに運転を止めていたら、あの事故は、なかったかもしれない。

「福島の事故以前の想定は、不十分でした。想定の枠組みを拡大したので、これからは、だいじょうぶです。」と言って、原子力村のヒト達は、現在、次々と原発を再稼働させている。彼らの説明によると、事故の可能性は十万年に一回以下なのだそうだ（電気事業連合会2022）。この数字は、信頼できない。そもそも原発自体が、設備の老朽化により、百年程度で破綻する。十万年は大丈夫というのは、ありえない。結局、原子力村の人たちは、勝手に作った想定の中で新たな安全神話を語っているのに過ぎない。そして、もし、事故が再発したら、「想定外でした。」と言うのだろう。



新たな安全神話：再稼働した原発9基に想定されている事故の発生頻度
（電気事業連合会 2022年）

今年の夏は、例年にない猛暑に見舞われている。それでも電力危機が起きていない理由は、間違いなく、近年急速に普及した太陽光発電のおかげである。盛夏の電力需要を支えるとされてきた原子力発電は、電力の供給過剰を来しかねない。

また、安価と言われる原子力発電のコストには、廃棄物の処理や将来の廃炉作業にかかる費用は、計上されていない。さらに、福島の後始末にかかっている費用も別枠とされている。こうした費用は、本来、すべて考慮すべきだから、原発ほどコストの高い発電方法はない。

原子力発電は、原子爆弾と同じ核エネルギーを使っている。そのため、暴走すると大爆発する。もし、敦賀湾のように多くの原子炉が、集まっていると、ひとつの原子炉が爆発すれば近隣の原発作業員全員が避難するので、すべて制御不能になる。そして、発電所内に保管されている使用済み核燃料（高濃度放射性廃棄物）が、広範囲に拡散して、日本列島にはヒトが住めなくなる。そういう事態は、簡単に「想定できる。」

これだけの負の要因を見て見ぬ振りをして、相変わらず、原発を推進する動きは活発である。その裏には、原発に依存して生活している人たちの存在がある。我々の子孫が生きていく未来の安全は、この経済の構造をいかに改革するかに、かかっている。

●筆者のプロフィール
バナナの皮を踏むと滑る理由を世界で初めて科学的に解明しイグノーベル物理学賞（人を笑わせ、考えさせる研究に贈られる）を2014年に受賞

当誌の2ページ「視点」欄は、社説（編集部の主張）ではなく、寄稿者ご自身の見解（視点）を掲載するコーナーです。どなたでもご投稿いただけますので、ぜひお気軽に本誌までお問い合わせください。

宇宙生命哲学者大いに語る（第10回）

宇宙開発は地球上の文明の進化のためである

北里環境科学センター名誉顧問
神奈川県相模原市　伊藤 俊洋

宇宙から地球を見るという視点で、俯瞰的に地球上の生命現象を理解・考察し、人類の一人ひとりの根源的な生き方を提言することが、「宇宙生命哲学」の使命である。地球上の全ての生物は、地球環境から生まれてきて、死ぬと地球環境に戻ってゆく。言いかえると、地球という惑星は、その惑星上の全ての生物が、その環境の中で、過去から現在へ、現在から未来へと循環している時空を超えた高次元巨大環境生命体（宇宙船地球号）と考えることができる。我々人類は、この宇宙船地球号の水先案内人の役割を果たさなければならない。人類が目指す宇宙開発の真の目標は、どこにあるのだろうか？

惑星間移住計画の現状

近年の宇宙開発で特に注目される話題は、アメリカを中心にした国際月探査計画（アルテミス計画）で、２０２６年には日本人宇宙飛行士が、米国人以外では初めて月面に立つ予定になっている。スペースXの、イーロン・マスク氏は、今世紀中に火星に１００万人の都市を作ると公言している。

正に、人類が地球から宇宙へ飛び出て、宇宙大航海時代の始まりであると扇動するメディアも少なくない。異常気象や戦争の惨禍に苛まれる地球上の悲惨な状況を目の当たりにすると、人類の関心が宇宙に向くのは、自然の成り行きかもしれないが、本当にそうだろうか。

私は宇宙大航海時代が来たとは思っていない。人類を含めて、全ての生命は、地球環境を離れては生存出来ない。地球上の生命は、地球環境中で循環し、地球は時空を超えた環境生命体と考えることが、宇宙生命哲学の原点である。

地球上に限らず宇宙のどこででも、人類だけでは生存できない。人類が地球外の宇宙で生存するためには、地球環境を切り取ってそこに運ばなければならない。そのためには莫大な資源とエネルギーを必要とし、地球環境の深刻な破壊を引き起こすことになる。このことが理解されていないと、宇宙開発が人類の文明を滅ぼすことになりかねない。

最先端の天文学者の提言

この度、国立天文台教授・台長特別補佐の阪本成一先生の「宇宙からみる地球と人類の未来」というご講演を拝聴する機会があった。阪本先生は、ＪＡＸＡ（日本宇宙研究開発機構）での教授在任時には、はやぶさ1号・2号、かぐや、あかつきなどのプロジェクトを指揮され、国立天文台チリ観測所の所長としてアルマプロジェクトを牽引し、大きな功績をあげられた。一般市民向けの宇宙科学研究に関わる広報も担当され、天文学や宇宙科学に限らず科学全般をもっと身近なものにして、科学的にものを考える習慣を広めることが社会にとって大切であることを常々口にされていると伺った。

アルマ望遠鏡～標高5000メートルのアタカマ砂漠（南米チリ）に建設された電波望遠鏡

人類はなぜ宇宙へ行くのか

人類が宇宙を目指すのは、地球外に住むためではなく、地球文明をより豊かにするためである。宇宙には地球とは異なる過酷な環境があり、それを利用した様々な実験が可能となる。その成果は地球の科学や技術に大きく貢献する。また、宇宙での体験を通じて、地球がいかに恵まれた星であるかを実感することができる。宇宙空間での生活に比べれば、地球での生活は非常に快適であると気付かされるのだ。

さらに、地球外文明との接触の可能性について、ドレイクの方程式を用いた話も興味深かった。阪本先生の講演では、月や火星と地球との環境の違いが詳しく語られ、惑星間移住の難しさが改めて認識された。そして先生の考えは私が提唱している「宇宙生命哲学」と深く共通しており、講演後の懇親会でそのことを確認し、意気投合した。私の活動に自信と勇気を与えてくれる、まさに歴史的な出会いであった。

「何を今更」と思いながら進めてきた活動であるが、阪本先生との出会いは、私に取って歴史的な一歩となった。

本稿は、相模経済新聞2025年３月10日号コラム「宇宙生命哲学ことはじめ75」を、補筆再構成したものである。

敗戦の日、靖国神社に行きました

東京　馬場　正雄

父は『この戦争は負ける』と人目を構わず口にしたので母は心配したそうだ。父はフイリッピンで捕虜になって生き延びた。父が帰国した折に私は馴染まず母の後ろに隠れた。父は後年誰もが武器を持たなければ戦争は起こらないのにと話していた記憶がある。

九段下地下鉄駅は靖国に向かう人でかなり混んでいた。10時過ぎに大鳥居に向かう。歩道の両側からチラシを次々と渡されるのを全部もらうことにして坂を登って行った。左右にのぼりや旗がひるがえる。一つ一つ見ると殆ど中露・共産主義に対抗する言葉だ。『北方領土奪還』『水爆を撃つなら撃ってみよ、死ぬのはお前らだ』と勇ましい立看板もあった。

昔も今も何故か右翼は共産主義が嫌いらしい。20mの黒い立派な大鳥居が眼をかぶさる。周りの人達の年齢層は比較的幅が広い。そう言えば私は十年程前の同じ日にここに来たことがある。その時は軍服や旧軍姿を思わせるかっこうが目に付いた。しかし80年のこの日は殆どが平服の手ぶらで、以前のように集団で礼拝する姿は目にしない。英霊を追悼する呼びかけもほとんどないが、人だけはやたらと多い。

参政党らが盛り上げた「国に殉じた英霊に感謝しよう」との言葉には（ややもすれば軍国につながるような）愛国的な人々が増えているのかと心配になってきた。幅の広い参道の中央に、日本陸軍の創立者とも言える長州藩士・大村益次郎の銅像（高さ12m）が立っている。その先の第二鳥居からは左右に十列くらいの参拝者があり、ここが最後尾のようで「参拝までには1時間半ほどかかります」とマイク。

猛暑の中に敬服である。前回は正午前だったがこんなに居なかったはずだ。ここでも少しは黒めの礼服もいたが、多くは普通の人々である。私は参拝目的ではないからと並ばずに右側をすり抜けて拝殿に向かった。靖国神社に協賛を求める会などの白いテントが随所に並ぶ。その一つに冷たい麦茶の接待で2カップ飲んだ。その傍でマイクの声が響いている。

『国を守ろうとした英霊のお蔭で今の平和な日本があるのです、感謝して手を合わせましょう！』

あれ？　私は戦没者が悼む思いは人後に落ちないつもりだが、彼らは平和を守ろうとしたのかな？

拝殿の前に列を成す参拝者

だったら戦争を始めなければ良かったではないか。結果として守ろうとしたが守り切れなかったわけだ。

後世の誰かが勝手に彼らは〈平和な日本を望んでいた〉との善意を作ったのではないか。彼らに教え込まれた理想からすれば、今の日本は情けなく悔しい姿に映るだろう。残念ながら日米中の国力を考えると今のバランスが順当と思える。

戦前の軍国主義を支えた国家神道の中心的施設に政治指導者が参拝するのは過去を正当化（16日朝日新聞社説より）

拝殿を横目に見ながら参拝の列の間を抜け、南門を出て、広い靖国通りと内堀通りが交わるT字の角に出る。靖国名物？の右翼装甲車が3台しか見えないなと思ったが皇居方面にズラーッと並んでいた。おや、上下黒スーツの強面の…やくざ、いや、右翼も類似集団、親分風の男を真ん中に左右を10人近くのスキンヘッドが固めて靖国に向かった。シャッターチャンスは逃した。

歩道橋に上がって南門方面の左右に堂々と駐車中の街宣カーを写す。橋の下を、こじんまりした宣伝カーが、申し訳程度に英霊を讃えるアナウンスを流しながら、機動隊装甲車の間を走り抜けていった。左に曲がって千鳥ヶ淵の戦没者墓苑に行こうとするが、警備の為に大回りさせられた。石破首相が参拝しているからと11時15分まで入域を待たされた。

平和を誓う8・15集会は12時前に黙祷から始まった。フォーラム平和・人権・環境が主催の追悼には立憲民主党・近藤昭一、社会民主党・ラサール石井議員らが誓いの言葉を述べた。その後労組の代表らの献花――何故だか公務員労組ばかりである。他方参政党が国政、地方議員の88名が靖国に集団昇殿参拝したとか。

ラサール石井・参議院議員
千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて

1時前帰路に就く。相変わらず靖国への人の波は続いて、マイクは「参拝迄2時間かかります」と。お堀端の歩道の左右に日蓮宗顕正会のおばさんが50人ほど熱心に反創価学会の新聞を差し出す。はて、日本は今後どうなるのだろうか？　明日、映画『YUKIKAZE』（帝国海軍の幸運の駆逐艦）を観に行こう。

最後の幕臣「小栗上野介」（中）

2027年NHK大河ドラマ化決定

新潟県三条市　丸山　善三

前月号（八一号）（上）では、小栗上野介のプロフィールとその功績を述べた。今回（中）では、幕臣、小栗上野介が遣米使節団としてアメリカに派遣された際の幾つかの見聞について述べたい。

その一、日米通貨交渉（日米通貨比率問題の提起）

日米修好通商条約には、当時の日本にとって不利な条項が盛り込まれていた。小栗は、日米間の為替レートである一メキシコドル銀貨と日本の一分銀三枚がアメリカ側に三倍の利ザヤとなっている現況を確かめ、その不公平さに言及した。

これら日米通貨比率問題での小栗の勇気ある行動は、アメリカ側にとっては、意見を堂々と主張するシャープな人物として評価された。

その二、先進工場の施設見学による近代化への見聞

ワシントン海軍造船所を訪問した際に小栗は、原材料として鉄が使われ、動力として蒸気機関が船や工場設備に配されていることに驚愕した。そして、実際に使われているネジやばねを持ち帰った。小栗にとって海軍造船所の見学は、日本の近代化を実現するための貴重な体験であった。

具体的には、帰国後、ワシントン海軍造船所での設備等を大いに参考にしながらフランスの援助を受けて横須賀の地に工場を建設して、その構想を結実させることになった。

その三、汽車の乗車体験による鉄道の構想化

小栗上野介は、パナマから大西洋へ進む蒸気機関車（パナマ鉄道）を初めて体験した。この鉄道が、パナマ鉄道会社が用意したものであると聞いた小栗の関心は、鉄道建設の運用経費とその調達方法、更には経営形態に向けられた。事実、小栗は帰国した後、民間の資本を活用したコンパニー（株式会社）の創設を構想し、これによって日本近代化の抱負を抱くことになる。

その四、新聞社訪問による近代的な報道形態を知る

小栗はハワイのホノルル訪問時、新聞社を訪ねた。彼は、渡米時に多くの洋式新聞に出会った。さらに、日本のかわら版と比べて、その正確さ、迅速さに驚愕した。帰国後、福沢諭吉と新聞発行を計画し、時の幕府に献策するところまでいったが、それに賛同する者はなく、結局、実現することは出来なかった。

次に「近代化」をキーワードとして、小栗が遣米視察の体験から見聞を得て、日本の近代建設のため取り組んだ事例を述べてみることにしたい。

その一、横須賀造船所の建設

幾つかの小栗の大きな事業で第一に取り上げたいのは、横須賀造船所の建設事業化である。幕府の要職にいた小栗は、フランスの協力（二四〇万ドルの借款と技術者派遣）を得る形で、一八六四年（文久四年）、念願の造船所建設に取りかかった。

そして、一八六六年（慶応二年）に念願であった横須賀製鉄所が設立された。当時の横須賀造船所の技術は、富岡製糸場（世界遺産登録）の建設にも遺憾なく発揮されている。造船所発足後、特記すべきは、この地で近代生産工場としての組織的な管理・運営（労務等）を行っていたことであろう。つまり、日本初の近代的マネジメントを行っていたのである。正に小栗は、日本における「近代マネジメントの父」の役割も果たしていたといえる。さらに、当時すでに近代的な会計制度を導入した功績も認められる。

その二、築地ホテル（日本最初のホテル）の建設

築地ホテル館の建設は、イギリス人パークスのホテル建設の要請により、必要な資金を民間から募り、配分する方式を採用した。そして、清水組（現・清水建設）第二代目・清水喜助が工事を請けた。この建設一切を主導したのは小栗上野介であった。

その三、仏語伝習所（フランス語学校）の開設

小栗は、フランス人、ロッシュの勧めで横浜に横浜仏語伝習所を一八六五年（慶応元年）、設立した。その授業は、フランス語で行われ卒業生は、富岡製糸場へも派遣された。その他小栗上野介は、その後も鉄鉱山開発や書伝箱（郵便）・電信事業の建議、ガス灯設置の建議、鉄道建設（江戸―横浜）の建議など、多くの事業の建議を行った。

小栗上野介は、海外への派遣経験という貴重な土台を持ち合わせながらも、幾つかの転機を迎えることになった。その転換点で日本の近代化に向かって奔走する中でも、良き理解者・協力者を得ることができた。

人生には、すべからく「転機」というものが存在する。次回（下）では、小栗上野介の「転機」とはなんであったのか？について述べてみたい。

小栗上野介は幕臣でも薩長よりも開明的であった。遣米使節団に抜擢され、米国の最新技術や制度を見聞して日本の近代化の必要性を痛感し横須賀造船建設、仏語伝習所や日本初の株式会社（兵庫商社）の設立、仏式軍隊の導入や郵便制度・新聞発行の提唱など多岐に渡って活躍した。だが小栗の功績は現代多くを評価されていない。小栗の実行力を恐れた薩長の手で隠棲さきの群馬県倉淵にて無実の罪で斬首された。

ライン河クルージングの旅

兵庫県在住　重藤 千恵美

歴史や宗教に裏打ちされたヨーロッパの景色や建物は、東洋のそれとは違う趣があり、その美しさに私たちは惹かれる。四月末、私はライン河モーゼル河クルーズの旅に参加した。夫の第二の退職記念と、私の長年の夢だったこともあり、節目の年に思い出に残る何かをしたかったからだ。

ライン河は流域に六つの国を有する国際河川だ。私たちはまず、オランダのユトレヒトで乗船し、ケルンなどドイツの六つの街とルクセンブルグ、フランスのアルザス地方をめぐりスイスのバーゼルまでクルーズした。

朝、カーテンを開けると川岸に沿って小さな町が目に入り、思わず「わぁ！絵になる！」と叫んだ。建物の壁は白、屋根は黒か濃い灰色の組み合わせで統一され新緑に映えて美しい。そして、そこには必ず教会がある。

ライン河はクルーズ船だけでなく、コンテナ船も航行していて化学薬品やくず鉄なども輸送している。川岸にはキャンプ場があり、キャンピングカーで乗り付けた人々がバーベキューを楽しみ、時折、私たちに手を振ってくれた。この河はドイツ人の生活に大きく関わっているようだ。

メルヘンチックな街並みのコルマール

ライン河クルーズのハイライトは古城渓谷クルーズだ。左右に中世の古城が次々と現れ私たちはデッキでホットワインを飲みながら写真を撮って景色を堪能した。古城はかつて通行税を徴収するための税関の役割を果たしていた。

次に入港したリューデスハイムは白ワインの生産が有名で、山頂の展望台に上るゴンドラからは広々としたブドウ畑と中世の街並みやライン河が一望できた。

ここでは、リューデスハイムコーヒーが外せない。カップに角砂糖、ブランデーを入れて点火。燃え上がらせて、コーヒーを注ぎ、生クリームをたっぷり載せる。パーフォーマンスを見るのも楽しく、これはここでしか体験できないだろう。

ライン河はフランスにも流れている。ストラスブールは長い歴史の中で、フランスとドイツの間で何度も国が変わり、二つの文化が混ざり合って発展してきた。建物もドイツらしい木組みの家もあれば、それを嫌って木組みを剥がしてフランス風にしている家もあった。旅行中ローマ教皇が亡くなり、大聖堂には写真と記帳のためのノートが置かれ、祈りを捧げる人や記帳する人も見受けられた。コルマールは絵本から飛び出たような可愛い街並みで散策するだけで幸せな気分だった。

フランス旅行といえば、パリ、モンサンミッシェルなどが定番だが、私はアルザス地方も是非お勧めしたい。メルヘンの世界に迷い込んだようで、誰もが心を魅了されるに違いない。ただ、ここはトイレ事情が悪く、その点では日本は世界一だと誇らしく思った。

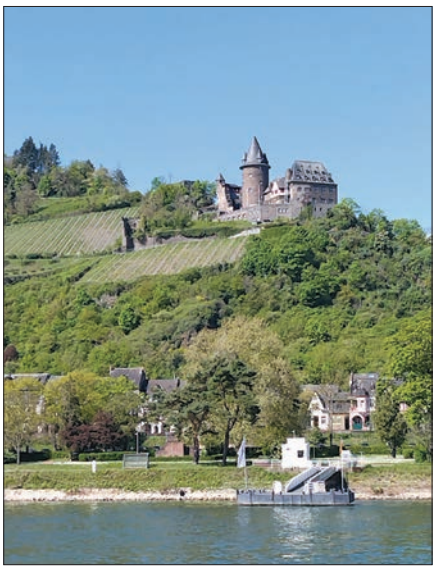
そして、船は最後にバーゼルに着きクルーズ船の旅はここで終了した。

ライン河は勾配が少なく流れも穏やかだった。旅の参加者は、皆現役を退きそれぞれの人生のドラマを演じてきた人たちの集まりだった。川の流れは、時に人生にも例えられるが、ライン河の流れに自身のそれもオーバーラップさせていただろうか。

船内ではイベントを楽しみ、ワイン片手に食事をしながら旅行やプライベートの話、今後の計画などで盛り上がっていた。日常から解放されこれまでの自分にご褒美をあげ労をねぎらっているかのようにも見えたし、一方で生き急いでいるかのようにも見えた。

リバークルーズの船は、背が低くて笹の葉に似ている。笹の葉が川を流れるようにゆったりと進み、そこから見えたヨーロッパはやっぱり期待を裏切らなかった。

皆と共有した十二日間の旅の感動の余韻はもう暫く続きそうだ。



ライン河渓谷と古城（世界遺産）

ジジババたちの山歩き

「山モガボの会」を結成

ライター　清水 久美子

蛇が嫌いである。

いや、怖い！

子育てを終え、仕事も一段落し、〈山でも歩きたい〉と考えたとき、ネックになったひとつが蛇だった。

山には蛇が出る。

出くわしたら、私は恐怖で金縛り状態になる。いや、心臓が止まるかもしれない。

山を歩くなら、私には蛇を払ってくれる人がどうしても必要だと考えた。

で、高校の同期の数人に「一緒に山を歩かない？」と声をかけてみた。六十代後半に差し掛かろうかという頃。同期の多くが、仕事はフルタイムではなくなっているはずだ。

こうしてメンバーが集まり、三人から五～六人のパーティで山を歩くようになった。名付けて「山モガボの会」。

モガボの意味は、大正時代のモダンガール、モダンボーイの略ではない。我ら、いまはジジババでも、高校時代はセーラー服の少女と、詰襟学生服の紅顔の美？少年たちであった。つまり、元ガールズと元ボーイズである。その略である。

メンバーは「自分が山を歩くなんて夢にも思わなかった」という人が多く、なんと年に二、三度、高尾山を歩いていた私がいちばんの「経験者」だった。

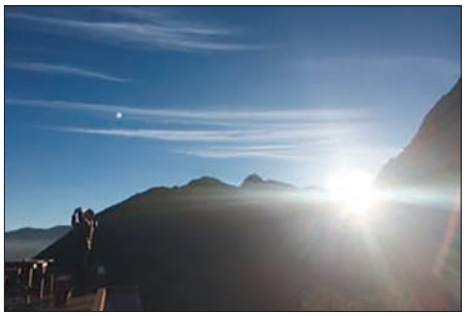
山歩きのガイドブックを買ってきて、ネットでもあれこれ調べ、とっつきやすそうで面白そうな山を探し、低山歩きから始めた。

巨岩・奇岩の石老山にて
〈山仲間提供〉

山もさりながら、我らのもうひとつの楽しみは下山後の飲み会であった。山歩きを始めた当初は男性陣から「日帰り温泉に行きたい」といわれ、ヨレヨレ・クタクタになって辿り着いた日帰り温泉の施設で、汗を流してから一杯！　これがたまらなかった。

少し歩けるようになると、標高の高い山と山小屋泊に挑戦した。

みんな初体験だから期待に胸がふくらむ。ワクワクと準備した。「山小屋では消灯後は真っ暗だから、ヘッドライトが必需品らしい」などと情報を集め、互いにメールする。「山で飲む酒は旨いらしい」「俺が焼酎を持っていこう」「僕はウイスキーを」「じゃあ、私はつまみを適当に」などと分担もたちまち決まった。あのウキウキした気分は、遠足前の小学生さながらだったと思う。



山小屋泊をした翌朝、朝日を望む

毎年一回、丹沢や八ヶ岳の標高の高い山に挑戦した。もちろん、こちとらジジババだから、タクシーやロープウエイで可能な限り標高の高いところまで行き、そこからエッチラオッチラ登る。

いわば「手抜き」登山だった。

〈今度は北アルプスに挑戦しようか。憧れの燕岳は手強そう。でも、標高二六七七メートルの蝶が岳なら二泊すれば可能かな〉と思案しているとき、コロナ禍に見舞われた。

北アルプスは夢と消え、コツコツ蓄えてきた体力は老化も手伝って下降の一途。おまけに怪我や病気で無理ができなくなった仲間や、妻の介護に追われる仲間もでてきた。いまや山モガボは、遊歩道歩きがメインと化した。

白蓮の眠る顕鏡寺から山頂へ向かう道
（石老山）〈山仲間提供〉

それでも思い出す。

丹沢の塔ノ岳の山頂・尊仏山荘から眺めた夕日の荘厳さを。そびえ立つ富士山をバックに、刻々と色が変わる大空がどれだけ美しかったか。

「もう死んでもいい」と仲間がつぶやいたほど、それは息を飲む光景だった。

八ヶ岳の独立峰・蓼科山では、まだ明けきらぬ中、山小屋から数十メートル先のガレキの山頂に向かった。下界は雲海が広がる異次元空間。太陽がほんの少し頭を出すと、地平線から空が赤のグラデーションを描きながら明けていく。曙色の空の下で、雲海がほどけ、山々のシルエットが夢のように浮かび出る。おごそかとしか言いようがない光景であり、あれは神秘の時間だった。

山男や山女は、詩人であり、哲学者なのかもしれないと思った。

山女にはなれなかったが、山歩きをして、以前より少しは敬虔になれた気がする。

山は神なのかもしれない。

清水久美子プロフィール～福岡県生まれ。『月刊現代』（休刊）で著者インタビューなど、多数の月刊誌でインタビュー記事を手掛ける。著書に『夢がかなう日』（偕成社）や『サッカーボーイズ　明日への絆』（カンゼン）など。山姥（ヤマンバ）通信（ライブドアブログ）を不定期に更新中～「ヤマンバ通信」で検索してください。　https://yamanba.blog.jp/

極端な応援はマイナスにしかならない
～なぜ気づかないのか～

大阪　貴澄　ハル

2025年参院選を振り返って

7月の参院選を見て、改めて強く感じたことがあります。それは、「極端な応援は、むしろマイナスにしかならない」ということです。

よく言われるように、国民の思想分布は大まかに「保守：中間層：左派＝2：6：2」とされています。つまり、保守・左派のいずれも、勝敗を左右する6の中間層をいかに取り込むかがカギとなります。

ところが各陣営には、むしろ中間層を遠ざけてしまうような〝過激な応援〟を繰り広げる熱心な支持者がいます。彼らの振る舞いは、支持拡大どころか、一般の人（中間層）に不信感や嫌悪感を与えているのです。

左派陣営における過激さ

とりわけ一部の「左派活動家」と呼ばれる人々の行動は、支持拡大とは真逆の効果を生んでいるように見えます。

一昨年「つばさの党」による妨害行為が問題視され、逮捕者が出て法改正にまで至った件は記憶に新しいでしょう。都知事選では、もはや破壊活動と呼ぶべき行動が展開されていました。

現在では拡声器の使用が制限されたものの、罵声を浴びせるスタイルは健在です。保守系候補の演説に乗り込んでは罵倒を浴びせる――たとえそこに事実が含まれていても、聞いている中間層は、内容よりも「その態度」に反発を抱くものです。

私が見た（某保守派政党の）大阪での街頭演説では、左派活動家が大阪弁で怒声を飛ばしていました。その荒々しさが、かえって攻撃された候補への同情を誘っていたのです。

中間層が見ているのは「姿勢」

こうした過激な応援が、一部の支持者には「正義の戦い」として映っているかもしれません。しかし、少し距離を取って見ている多くの中間層には、「単なる過激派の暴走」にしか見えないのです。

単なる過激派の暴走？

これは保守・左派を問わず、共通の問題です。自分たちの思想を絶対視し、異なる立場を排除の対象とし、説得ではなく攻撃に走る。その結果、中間層は距離を置き、攻撃された側に共感を覚える――。これこそが「極端な応援がマイナスになる」最大の理由です。

伝え方こそが命

政治的主張を持つこと自体は、健全な民主主義に不可欠です。保守にも左派にも、それぞれに大切な価値観があります。ただし、重要なのはその「伝え方」です。

声を荒げ、相手を罵倒し、SNSで誹謗中傷を拡散する――そうした行動は、支持を広げるどころか、むしろ敵を増やしているのです。

熱意は必要ですが、それが暴走すれば社会にとって〝脅威〟となります。

その昔、左翼の過激な活動が多くの中道、無党派、無関心層を反左翼に向かわせたのが、赤軍派などの内ゲバや自己批判による粛清が最たるものでしょう。

そこまで行かなくても『反対の為の反対的活動』がひんしゅくを買います。同調者もいるとは思いますが、中間層にシンパを得るまでにはなりません。

選挙や街宣活動のヤジも限度を超えると妨害活動にしかならず、妨害活動側への拒否反応になってしまいます。

経産省前の路上で反原発座り込みのテントに「なんでそこまでするのか」と嫌悪感まで持つ人もいるでしょう。「同調者を生むよりも反感者を増やすのでは」と思ってしまうのは私だけでしょうか。

同調者を増やすのではなく「自分が満足するため」「日頃の憂さ晴らし」で騒いでいるようにしか見えません。

保守派の論客のみならず一般の人々にまで「今だ暴力革命」と思われても仕方ないでしょう。

私は保守系の主張に共感する部分が多くあります。しかし、その思いが過激な言動によって誤解され、本来伝わるべき論点が歪められてしまう――そんな場面を幾度となく目にしてきました。それは実に惜しいことだと感じます。

政治を動かすのは、声の大きさではなく、信頼の広がりです。

「遠巻きに見つめている中間層の心に届くかどうか」

それこそが、保守であれ左派であれ、真に支持を広げるための決定的な分かれ目なのではないでしょうか。

広島の日、湯崎知事の言葉を噛みしめる

東京　三田 栄考

8月6日、テレビは湯崎英彦広島県知事の挨拶を詳しく伝えた。慰霊碑の前で知事が毎年発してきたことすら私は知らなかった。だが、今年の県知事の言葉は私の胸に刺さった。

《確かに、戦争をできるだけ防ぐために抑止の概念は必要かも知れません。一方で歴史が証明するように古代ギリシャの昔から、力の均衡による抑止は繰り返し破られてきました。なぜなら、抑止とはフイクションであり、万有引力の法則のような普遍の物理的真理ではないからです。自信過剰な指導者の出現、突出したエゴ、高揚した民衆の圧力。あるいは誤解や錯誤により抑止は破られてきました。我が国も、力の均衡では圧倒的不利と知りながらも、自から太平洋戦争の端緒を切ったように、人間は必ずしも抑止論、特に核抑止論とする合理的判断が常に働くとは限らないことを我が国は身を以て示しています。抑止力とは、武力の均衡のみを指すものではなく、ソフトパワーや外交を含む広い概念であるはずです。核抑止の維持に年間14兆円超が投入されています。その十分の一でも、核のない新たな安全保障のあり方を構築するために頭脳と資源を集中することこそ、今我々が力を入れるべきです》

湯崎広島県知事

このメッセージは私の思いと同じである。次いでテレビは石破首相、岸田、菅元首相に並んで神谷参政党首が写し出された。翌日の朝日新聞に《平和宣言を読み上げた子供らを前にして『核兵器が一番安上がり』と主張できるのか?』と問うていた。そして私は続けて言おう。核抑止を叫ぶ人は核保有対峙が永久に続くとは思っていないでしょう。いつの日かは破綻の核戦争か、核廃棄のどちらかでしょう。だったら核拡散の少ない現在の時期でないと核廃棄は難しいでしょうと。

8月は広島、長崎、敗戦の月、我々は原爆と戦争に向き合う

参議院選挙後8人の国会議員が日本でも核兵器を保有すべしと奥目もなく答えた。（参政6、自民1、保守1）広島、長崎から80年、原爆を実体験して被爆手帳保持者は10万人を下回ったそうだ。原爆の恐ろしさを子や孫や若者に伝えることの大切さは言うまでもない。が、それだけでは唯一の被爆国でも核撲滅できないことをこの数字が表している。プーチンが核使用をちらつかせたり、トランプが軽率に広島、長崎を口にする。原爆を絶対使用してはならないという気持ちが緩んでいるからだろう。諸外国では戦争や原爆に対する感覚は薄いものであるーそれを覚悟して我々の働きかけでなければいけない。

恒久平和は百年後の世界連邦をめざしてこそ

おかしい！安全保障と言えば軍備増強しか議論しようとしないのは。平和外交こそ強力で安上がりの安全保障だ。バングラデシュのユヌス氏暫定首脳は訪日の折に、『防衛省があるなら平和省も設置』と提唱した。我が意を得たりの思いだ。せめて《平和防衛省》と称したらどうだ。軍人は自分の存在価値を高める為に他国の脅威・軍拡しか宣伝しないから。

平和記念式「子ども平和への誓い」
佐々木駿くん（祇園小学校6年）
関口千恵璃さん（皆実小学校6年）

軍事よりも平和を優先する世界の首脳は数少ないのは残念だ。平和外交に執念を燃やす与野党首も余り見られない。精々スローガンのみで外国に向かってこじ開ける努力は見られない。小さな尖閣島や意味のないJアラートに狂奔するばかりで、根っこの問題の解決に努力をしない。歴史を修正すれば相手に敵意を募らせる。隣国と国交すらなければ拉致問題は解決できずに北のミサイル口実を与えるだけだ。

国益と国家を唱える限り、国境が存在する限りは、世に戦争の種は尽きない。だったら百年後の世界連邦に向かう為の政治・外交をと、呼び掛けたい。国連に力が無いというのはたやすいが、各方面で国連は地味な活動を行い成果を挙げている。国連を強化しEUのような形態で世界融和から世界連邦をめざすしか恒久平和は実現できない。どういうわけかこんな簡単な理論が平和運動の共通理念にならないのは不思議だ。権力者や為政者が唱える愛国心こそ国と国民を滅ぼすと。

戦後80年の随想

江東市民連合世話人
木庭　みち子

１９４８年3月18日に、愛知県名古屋市郊外のローカル線、名鉄犬山線のＴ市に生まれ22歳で東京に上京、現在に至るまでの戦後80年、時代の流れとともに生きてきて戦後の歴史を私の人生と重ね合わせて振り返るとき、これからの社会の在り方を見つめてみたいと思います。

特に今の私の生き方を示唆した青年期の時代を振り返り、走馬燈のように浮かぶ幾つかのエピソードを紹介します。

中学～高校時代、当時は珍しい中高一貫校の私学で学んでいました。中学生の時、今でも尊敬とあこがれを抱いた社会の女性教師の現代史の授業は、当時の社会の課題を教師から提示された複数のテーマから選択させ「調べ学習」としてグループで共同研究として進めその結果をまとめ、発表する授業でした。

私は、「日本の政治」のテーマを選択して、新聞の切り抜きやニュース番組から調べ、当時国会で話題になっていた「ＩＬＯ８７号条約批准」を取り上げました。

後にこの条約批准が、戦後労働者の権利としたスト権を公務員労働者から奪う内容を持っていたことを知り驚きました。ベトナム戦争をテーマに選んだグループは、調べ学習のまとめで泥沼化していくこの戦争で、アメリカが敗北すると結論を出しました。そして歴史の流れはそれを証明しました。

時代をさかのぼって11歳、5年生の時に毎日新聞一面トップで報道された60年安保闘争の報道写真、国会前は多くの旗と条約反対の圧倒的な群衆で埋め尽くされ、今でも私の脳裏に残っています。条約は締結されましたが当時の岸内閣は総辞職しました。

さて、念願の保育士になるために短期大学に進んだ私は保育の学びと学生セツルメント活動、毎夜3時間の時給１００円のアルバイト学生でした。セツルメント活動の地域は伊勢湾台風で大きな被害を出した名古屋南部の地域でした。救援活動をした先輩が立ち上げたサークルでした。

当時ベトナム反戦運動が世界のうねりとなり、10・21世界反戦デーに呼応して大学では学生自治会のストライキ、教授会のストライキと共闘した集会が行われ、夜は愛知県下の働く人や市民との大集会に合流し、名古屋の１００メートル道路をフランスデモ行進、ベトナム人民解放戦線の勝利を前にアメリカは逃げるように撤退し、ベトナム全土解放の勝利と共に世界が喜びで溢れました。

さて、保育者1年生の私は故郷のＴ市に就職しました。時代は、Ｔ市でも働く母親が増加、3歳未満の乳児保育を公立での市民の声が届き開設、新任の私にそのクラスの担任の辞令が下りました。夢中で15人の子ども達を保育した事、今でも昨日の事のように忘れられない思い出です。

東京では、美濃部革新都政前夜で「ポストの数ほど保育所を」の保育運動が展開されていました。社会の課題と向き合う生き方を選択していた私は、革新都政誕生に夜行バスで応援に駆け付けました以後上京して半世紀、戦後80年今年は特にテレビでもメディアでも15年戦争を振り返る様々な企画が目白押しです。

平和を考える8月、広島・長崎の記念式典は、両自治体の市長が核兵器廃絶をより具体的に世界に訴える内容は、映像を通して視聴した私たちの心に痛切に届き、核兵器廃絶の声を結集する市民活動を強め核兵器禁止条約の批准を政府に実行させる事をともに進めていくことを強く感じました。記念式典の広島・長崎両市長の訴えを広く伝えていくために継続して訴えていく市民運動がより強く求められた時代を迎えていると言えます。

これまでの様々な市民運動のナショナルセンターを創設し、党派の違いを超えてこの一点に集約したうねりを作り出せば、立憲野党政権の実現と合わせて一挙に時代は平和と民主主義・人権を求める方向へと歴史の弁証法に沿って突き進んでいくでしょう。

人々が安心して楽しく暮らす世の中を実現するためには未だ道半ばです。それどころか、平和・人権が否定される勢力がもてはやされる現実に愕然としながらも、子ども達の未来を戦争で閉ざすことがないよう団塊世代のメッセージを送ります。

「わずかな人生をあきらめずにしたたかに生きていこう。次の若い人たちにバトンを手渡して行くために」

「あうん」と「なるほどぉ～」のアイダ
～関係性をあそぶ 編集のチカラ～下編

中小企業家同友会会員 東京 原田 健也

日常会話で相手から言われると、腰を折られた気分になるフレーズがある。それは「え～、主語がないからわかんな～い」っていうヤツだ。こちとら急いどんだから、察して動いてくれや。あうんの呼吸って知らんのかッ。

…と思いながら、なにをお願いしてたんだっけと自ら振り返ると、意外とそのお願いもあいまいだったり、たいしたこともない依頼だったりするのはママあること。

前号で「編集」なるものがもつ魅力について触れさせていただいた。まん延する無関心を乗り越えるチカラが編集行為にあって、これは目の前のことに興味を持つことからはじまる。たったそれだけで日々をご機嫌に過ごすことが出来るカモしれないネ、ってなことを綴らせてもらった。

今回も編集者（編集工学者）の松岡正剛さんの言葉を用いながら、日々に役立つ編集について触れたい。テーマは「関係性をどう読むか」。その編集の一面は、もしかすると人間関係を穏やかに保つためのヒントになるかもしれない。

ちょっと遠回りになるかもしれないが、英語と日本語の違いについて述べていく。学問的なものでなく、単なる私の経験談だ。

新社会人駆け出しを少しはみ出た2000年半ばころ、必要性があってビジネス情報は洋書に頼るようになった。英語で文章を読むほど、英語は情報が伝えやすい（＝あうんの呼吸を得やすい、効率的）言語だと体感するようになった。

なぜか。それは英語は「誰が・何をした（主語と動詞）」が明快だからだ。一方、日本語は主語が省略される場合もあって話の流れでそれを判断する場合もあり、非効率な言葉ではないかとも感じはじめた。

ちなみに私は英語と日本語の違いをこのように述べることが多い。たとえば、あなたが小学校の飼育係だと想像してほしい。クラスでは金魚を飼っていて、その餌やりが飼育係の仕事。1学期が終わり、夏休みに。9月に学校に登校したら、金魚が死んでしまっていることに気がつく。その状況を飼育係のあなたならどう述べるだろう。一般的な言い方ならおそらくこうだ。「先生、金魚が死んでしまっています」。一方、英語であれば「I killed a goldfish（私が金魚を死なせてしまいました）」となるだろう。

日本語は主語がなく、なんとなく起きた状況を説明している。英語は私がどうしたか、が明確になっている。「ダカラナニ、ドウシテホシイノ」という、受け手の頭に浮かぶはてなマークに応えるには英語が優れているように思う。

ところが。松岡正剛さんは、日本語のその主語を省くことの特性が編集的にはあそびのスペースを生むのだ、と言うではないか（正確には動詞側、日本語の述語性を讃えている）。このおっさん、なんてこと言うんや。編集はわかりやすく相手にメッセージを伝えることが大切ではないのか。誰が・どうした、がハッキリしていた方が受け手は迷わないはずだ。

しかし、日本の歴史や神話を眺めると、主軸は乱立し、行ったり来たりしながら文脈を読み替え、日本人は時を重ねてきたこともわかる。たとえばアマテラスオオミカミとスサノオ。対照的に描かれ、多くの人の心をつかんで離さないが、同じ時に誕生した神様はもう一人いる。ツクヨミだ。

ツクヨミは前者2神ほど話には出てこない。それ以外にも日本の神話には3つの存在がありながらも、真ん中の存在は空気のようで、いるのかいないのかよくわからないままの存在があることを心理学者の河合隼雄氏も指摘している（中空構造日本の深層）。

ビジネス的にあえて言うなら、効率性をとるか、効果性をとるか、かもしれない。効率的にすぐ伝わるのは、言わばあうんの呼吸的な関係性。一方で、なにがどう影響を与えていくかを想像しながら、その関係性をなるほど～と味わうのは効果的な関係性。どっちが正解ではない。相手によって変わってくるだろう。

だから、ご機嫌に過ごすために関係性を編集的にとらえてもいいのではないか。一歩下がって眺める、よく観ることがきっと今、大切だ。日本にはその土壌があるのだ。

原田さんのプロフィール（ご自身で作成）：広告業界の末席にてちびちびビール飲みやりすごしています。語学マニア（各言語かじってるだけ）で、コロッケそば愛好家（コロッケをひたひたに出汁にひたして食すのが好き。この語感だけでご飯が３杯いけるカモ）。興味を持った情報は、なるべく原典に当たるようにしています。現在はデザイン研究者エツィオ・マンツィーニの原著に挑戦中（こう書けば読むだろう…たぶん）

帰還せず

東京　荒野の年金生活者
宮内　醉祥

「いよいよ十九日で終わりだぞ」、と学生時代の親友・一郎がメールで親切に知らせてくれたので、日曜の午後、妻と二人で神保町の岩波ホールへ出かけて行った。

一九二六年ポーランド生まれのアンジェイ・ワイダ監督の映画を見るのは、半世紀前、新宿の日活名画座で見た『地下水道』や『灰とダイアモンド』以来である。もう八十三歳になるワイダ監督の新作『カティンの森』（日本公開二〇〇九年）には、いまだ衰えていない映画への情熱に圧倒され、胸が熱くなるほど感動した。

一九四〇年、ソ連の捕虜になり行方不明になった二万人を越えるポーランド人将校と兵士の虐殺死体がソ連領カティン近郊の森で発見されたおぞましい事件は、今では一九八九―九〇年の東欧革命で、スターリンとソ連共産党政治局の許しがたい犯罪であったことが明らかになっているが、それまで、僕も妻もソ連のプロパガンダに踊らされ、愚かにもナチの犯罪だと信じ込まされていたのだ。この事件を縦糸に、行方不明になった夫、父親、息子を必死に探し、虚しく待ち続けた家族の残酷なエピソードを横糸に織り込み、戦争犯罪を糾弾する静かな怒りに、僕の体の震えは止まらなかった。

僕の父・牧次郎のルソン島バギオの山地での戦死公報（多分、餓死）を遺骨のないフィリピンの砂だけの小箱と共に受け取り、わずか二十五歳で未亡人（僕は数えの二歳）になったお袋はいったいどんな気持ちだったろうか。いくつかの再婚話を断り、ずっと親父を待ち続けたらしい。NHKの『尋ね人の時間』の放送に耳を傾けていたお袋の真剣な眼差しを今でもまざまざと思い出してしまう。しかし、学生時代の僕はテニス、ダンパ、映画、麻雀、ジャズ喫茶、無銭旅行などの遊びやバイトに忙しく、親父やお袋のことなど考えぬ親不孝者であった。

一九六六年、親父の遺族年金のお蔭で、成績不良ながら何とか大学を卒業、小さなメーカーの貿易部に配属され、二年後、旧西独・ハンブルグ市の子会社に赴任した。現地採用のドイツ人従業員や代理店、顧客との付き合いを通して、敗戦国の戦後処理の生き方について、ちゃらんぽらんな僕も初めて真面目に考えるようになったのだ。

岩波ホールは一九六八年開館、二〇二二年七月閉館した。総支配人は映画鑑賞運動家の故高野悦子。高野の選んだ名画は一本立てで一五〇〇円（シニア）は神楽坂の名画座・ギンレイホール（二本立てで一〇〇〇円）に比べると割高であったが、芸術志向の強い映画ファンの心をがっちり掴んでいた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で、客足が急減、クラウド・ファンディングでも大赤字を埋めることが出来ず、上記の名画座二軒とも閉鎖に追い込まれたのは残念至極である。

ワイダ監督はこの渾身の映画を今は亡き両親に捧げた。将校だった彼の父親もソ連軍に虐殺されているのだ。映画が終わり、薄暗い教会のような館内にレクイエムが響き、長いクレジットが流れる。満員の観客は身じろぎひとつせず、誰ひとり席を立たなかった。

その日二月十四日はバレンタインデー。欧州駐在時代（西独、スイス、フランス累計三十年）の習慣だったように、妻に深紅のバラもゴディバのチョコレートも贈らなかったけれど、『家族愛』『憲法九条』を考え直す大切な一日になった。（了）

『ミラボー橋の夕焼け』なる詩的な自費出版の本が小子に送られてきた。文章仲間の自伝的エッセイ集で冒頭に【父・宮内牧次郎、母・文子（旧姓杉浦）に捧ぐ】とあった。また、巻末に「僕のささやかな人生に最後まで寄りそってくださった皆さまに、心から『ありがとう、さようなら』と申しあげます」と締めくくっている。

本人の生きてきた証の惜別の書であろう。記念に寄稿をお願いしたのが『帰還せず』である。著者はメーカーの貿易部門に40年間勤務、そのうち累計30年間を西ドイツ、スイス、フランスの子会社の駐在員として過ごした。

父君は彼が一歳の時に赤紙に召されてルソン島のバギオ東方山地で戦死された。小子の父も比島で捕虜になり幸いにも帰還している。

二人三脚型の職縁選挙と地方議会

地域づくりボランティア八峰村 村長
信州小海町議員 渡辺 均

前回（81号）で『小さな町の議会選挙と民主主義』というタイトルで、町会議員選挙の顛末を紹介した。俗に選挙で勝利するには、地縁、血縁を軸にした地盤と、知名度を受け継ぐ看板、そしてカネを象徴するカバンの三つの「バン」が三種の神器と語られてきた。さすがに昨今の地方選挙で、とりわけ議員選挙においては、カバンの出番は少ない。単純な話、当選しても見返りが少なく割に合わない。事の是非はともかく、成り手不足がこのことを象徴している。知名度も、その効能はかつてほどの集票力は失われている。残るは地縁、血縁による地盤の威力である。

地縁については、集落を単位に、集落の代表という縁がある。しかしこれも過疎と高齢化で集落の崩壊が進み、集落が一丸となって獲得する時代ではなくなっている。血縁は相変わらず根強いが、少子化や核家族化で票の確保が難しくなっている。

三つの「バン」に代わって集票力を高めるものが、仕事／生業で培った縁である。これを「職縁」と呼ぶことにする。

いずこの町村でも、職種の割合の大小はあるが、役場があり、農林業、商工・観光や土木・建設、教育や医療・介護・福祉などで構成される。

これらの職と集票力の関連を見ると、農林業は、一部の大規模農家を除いて離農者が多く、農協も農家をまとめる力を弱めており、集票力は弱い。

農業体験農園 八峰村

商業は、駅前のシャッター通り化が示す通り地盤沈下が顕著で、地元需要すら賄えない状態に陥っている。中山間地での工業は、地場雇用を支える規模を有していないケースが多い。観光は、資源価値の差異／大小により一様ではないが、観光で支えられる町は多くない。

職とは異なるが、教育関係では、PTAなどを介した縁の力が期待され、とりわけ女性の政治参加が期待される中で、教育の政治化への懸念や、「女は政治に口を出すな」といった風が吹いている。福祉や介護を含めて医療分野でも、教育／PTA同様、担い手に女性は多いが、政治的な関りを避ける傾向が高く、縁を通じた政治勢力になり得ていない。

残るは、役場と土木・建設業系である。中山間地の土木、建築業界は、民間需要より公共事業に依存する割合が高く、それはそのまま行政と繋がってくる。行政は、自前の自由な財政力が弱まる中で、国からの交付税に依拠する度合いを高め、かつては3割自治を憂う声もあった。今はそれすらも叫ばれなくなり、交付税依存が当たり前、という寂しい地方自治体に成り下がっている。それを是としない限り、町村は成り立たないという現実がある。

松原高原の林間キャンプ風景

この現実を支えるのが、公共事業を国から取ってくる役場／行政と、それをこなす土木建設業との二人三脚型の地域づくりだ。その地域づくりに議会制民主主義の体裁を整えるのが、地方議会であり、地方議員であり、地方選挙である。

過疎と高齢化が謳われて久しいが、この三十余年間、何も変わっていない。依然として国／交付税への依存を変えようとしない行政があり、それに異を唱えない議会があり、そこに就労機会を得た有権者がおり、そういった人々が議員を選んでいるのだ。このような町村の選挙の成り行きは、自ずから現状維持を是とする結果を生む。この傾向に高齢者が拍車をかける。高齢者は地縁、血縁を重視する。二人三脚型の職を得て、地元を支え、家族を支える息子や娘の意向に高齢者は逆らえない。

過疎と高齢化の農山村で地域を守り、暮らしを成り立たせるためには、地場を支える二人三脚型の産業に依存せざるを得ない。有権者はそれに関わる方々に限られてくる。結果、二人三脚型の職縁を是とする有権者が多数を占め、自治意識の後退や公共土木に支えられる地域づくりに異論をはさむ有権者は少数派となる。変わらない・変えられない地方議会の限界がここにある。

ところが一陣の新風が吹き始めた。小海町でも隣接の市町村でも、地元に移り住んで間もない若い議員が上位当選を果たした。この新しい流れが、重く固い土を掘り起こし、新たな風土を生み出せるか。そのためにどんな地域づくりの方策が求められるか。次回にその一例を紹介したい。

渡辺均さんのプロフィール～77才、長野県立野沢北高、立教大社会学部卒、㈱社会調査研究所（現インテージ）、㈱富士経済を経てマーケティング会社㈱総合市場研究所を設立、大手企業や林野庁、経産省、総務省などの調査、研究活動に従事。講演先でコンサルは口ばっか、とキツイ言葉に触発され、故郷で土建に偏る地域振興政策からの脱皮を目指すが道半ば、２期目の町会議員。

共命鳥の慚愧の言葉
「命は誰のものですか」

真宗大谷派　敦賀市・高雲寺住職
ジェシー釋萌海
（しゃくほうかい）

全ての「いのち」を「仏のいのち」と受け取り、「ありがたい」と感謝の思いを込めて合掌する、この心を忘れずに生きていきたいものです。

今日は「すべてのいのちの尊さや、存在を大切にしあう社会」のシンボルである共命鳥の慚愧の言葉についてお伝えしたいと思います。

「これまで私はわがままを言いながらも、何とか元気で来られたのは、あなたがいてくれたからだった」「この私の命はあなたの命の上に出来上がっていたのだ」

「これまで私はわがままを言いながらも、何とか元気で来られたのは、あなたがいてくれたからだった」

日常生活の中で私たちを支えてくださっている人がいるからこそ、ここまで生きることができました。

私たちはつい、自分自身の力だけで生きていると思い込んでしまい、私たちを支えてくださっている人を忘れてしまうのです。

どうしてそうなるでしょうかね？

常にして頂いている事があると、知らないうちにその事を当たり前に思ってしまうのでしょうね。「ありがとう！」と感謝の言葉すら言わなくなります。当たり前だから、「ありがとう！」と言う必要もありません。

しかし、支えてくださった人がいなくなると、やっとして頂いた事に気付かされます。考えてみたら、本当に悲しい事です。

スイスに住む母が安楽死で亡くなる前に、私は泣きながら（日本から電話で）母を引き止めようとしましたが、母が、「これは私の命だから、あなたは私を引き止める権利がない！」と反論しました。

「自分の命」という主張をした母は、おそらく、自分一人の力で生きてこられた、と思い込んでいたでしょう。これは命の私有化と言いますが、自分の命だからこそ、自分で自分の死を決める権利があるのは当然だと。

しかし私たちは一人で生きていませんし、生きられません。

私たちの命は周りの人の命と絡み合い、全ての命は繋がっています。

ですから、母だけの命ではありません。自分の命は周りの人にも大きな影響を与えています。安楽死を独断して亡くなった母は、それでよかったかもしれないですが、残された人はそれによって傷つかれてしまいます。

自分さえよければ、それでいい、と自分のわがままな在り方に気付いていない事は本当に悲しいです。自覚できない限り、慚愧の心も生まれません。

私が自分の命を生きている、という風に考える人はほとんどでしょうが、しかし、実際は生かされています。むしろ、いのちが私となって、現れたと考えてみれば、意識が変わります。私も「今いのちがあなたを生きている」と言う東本願寺のテーマに考えさせられました。わたしが僧侶の道を歩むきっかけともなりました。

母の安楽死によって深い穴に落ちてしまい、前が見えない状態になりました。そこで初めて、自分に拠り所がないことに気づきました。

人間の在り方はそうでしょうが、元気な時、人生が思い通りにいっている時は拠り所を必要としませんが、不幸な事が起きたら、初めて拠り所が必要となります。

母の安楽死は、自殺幇助でしたが、その死に方が不自然で、素直に悲しむ事さえできないです。

そこで「命は誰のものですか」という問いに出遇いました。

いのちは、私に意識がある前からもう既に存在していました。

考えると不思議ですよね！

私の誕生で始まった訳ではないですし、私の死で終わることもありません。

私が生きていること、いのちあること、そのことが自然とか多くの人々によって支えられてあること、その事実に頭を下げよ、畏れ敬う心を取り戻せと、この私を呼びます言葉であると私は受け止めています。

共命鳥は、一つの身体に二つの頭をもつ鳥です。考え方、生き方が違っていても、そのいのちはつながっているという、鳥に姿をかえられた仏さまのみ教えを表しています。

「すべてのいのちの尊さや、存在を大切にしあう社会」のシンボルである共命鳥です。

また、本来は一つのもので

ジェシー釋萌海（しゃくほうかい）さんプロフィール～スイスの田舎町に生まれ、キリスト教の環境で育つ。しかし教えに疑問を感じ、自らの道を模索する中で仏教と出会う。やがて空手、居合道、尺八といった日本の伝統文化にも触れるようになる。来日して今年で21年。2018年に得度し、2024年には敦賀市にある高雲寺の住職に就任した。現在は門徒の皆さんと共に歩む「ご院さん」として親しまれている。

あるにも関わらず、自己中心的な考え方を主張することによって、共に害を被るということは、私たちの生活の上にもあてはまります。

自分勝手な思いを押し通すことは、自らを傷つけ、他人をも傷つけてしまうことになります。そこには自己中心的な思いで生きている私たちの在り方です。

私たちは自他共に傷ついていくばかりです。ここで共命鳥の話に戻りますが。

片方の頭が相手の頭に毒の実を食べさせたが、身体が一つですから、両方ともに命を落としてしまいました。

しかし、その命を落とす寸前に、その毒の実を食べさせた頭が、大切なことに気付き慚愧しました。

「これまで私はわがままを言いながらも、何とか元気で来られたのは、あなたがいてくれたからだった」

「この私の命はあなたの命の上に出来上がっていたのだ」ということに気付いたのです。

人はもちろん、動物にも草木にも大地にも「いのち」があります。この「いのち」を、遥か昔から脈々と「仏のいのちを継いできたもの」と受け止め、「ありがたい」と敬いと感謝の思いを込めて手を合わせる心を大事にしていきたいです。

食事のときに「いただきます」と、たくさんのいのちに感謝をして手を合わせますよね。これも、「いのち」に感謝し敬う心を行動に表した姿です。お寺で、家庭で、様々な場で手を合わせて礼拝するということには、いずれも感謝と尊敬の意味が込められています。

全ての「いのち」を「仏のいのち」と受け取り、「ありがたい」と感謝の思いを込めて合掌する、この心を忘れずに生きていきたいものです。

「これまで私はわがままを言いながらも、何とか元気で来られたのは、あなたがいてくれたからだった」

本当に有り難いです。

お浄土の共命の鳥は「他を滅ぼす道は己を滅ぼす道、他を生かす道こそ己の生かされる道」と鳴き続けています。（了）

読者のひろば

やられた！

山下 豊子

「やられた！　悔しい」

スマホの画面に、まだ完熟していない実が齧られ、茎ごと倒されたトウモロコシが写っていた。

4月の末から始めた、次女の農園である。畑の周りは、しっかりした金網の柵で囲ってあり、シカは入れない。犯人は、どこからでも入るハクビシンしか考えられない。

全国的にシカ、イノシシ、タヌキ、そしてハクビシンの被害が出ている。階下のYさんは、千葉で農園を借りて作物を育てている。朝早くトウモロコシを収穫しようと出かけたら「既にみんなハクビシンにやられた」と悔しそうに言っていた。

次女が移住した伊豆の赤沢でも、シカの数が増えている。夕方、車の前に急に現れ、気を付けないと事故になり兼ねない。今年もアジサイの新芽が食べられ、花が咲かなかった。

山の中に食べるものはいくらでもあるだろうに。わざわざ家の庭や畑に入り込む。秋になると柿やミカンはリスにやられる。レモンやユズなど酸味の強い物は齧らず、甘くて美味しい物を選ぶようだ。

「自分で作ると農家の大変さが分かるし、高い高いと文句ばかり言っていられないね」。畑の状況を逐次動画配信してくれる。

暑くて外に出られない私の、楽しみのひとつになっている。

余録

小誌は信仰を持たない。いや、全能の神か仏がおられるならもっと良い世界にしていただきたいと願う者である。

しかし、当誌は前号・今号とで青い目の住職を紹介させていただいたのは珍しさから来る野次馬根性故と指摘されても否定出来ない。

現に釋萌海住職は地元の福井県でもテレビで紹介される等で話題になっているそうだ。或いは住職はそれを逆手にとって教祖親鸞の教えを広められようとしているのかも知れない。

当誌への寄稿はじっくり読むと《ナルホド自分も生かされている》のかな？と考えさせられる。それは哲学でありその先に宗教があるのかも知れない。

スイス人女性が田舎の住職に、その生き方から学ぶべき点も多いことだろう。それだから当誌は今後も釋萌海師を注目し、今後も連絡を取り合いたいと思っています。師はどんな言葉で真宗の教えをどのように伝えているのか。村人との心の信頼関係をどう築いていくのかも注視したい。

編集後記

今回編集部（私）の唸った作品があります。清水久美子さんの『ジジババたちの山歩き』～これ、間違いなくプロの文章！と思い、ご本人に確認したところ、著書を何冊もお持ちで長らく編集の仕事に携わっていたとか。正しくプロ中のプロでした。やっぱりね。（笑）

当誌は無料のタウン誌です。「タダより高いものはない」と言われますが心配はご無用です。有志の独立した支援によって成り立っています。より多くの方に読んでいただくため、誌代・送料はすべて当誌が負担しています。カンパ（寄付）は歓迎いたします。趣旨に賛同しご協力頂ければ幸いです。

参議院選挙で浮き彫りになった我が国の右傾化

東京
元衆議院議員
初鹿 明博

7月20日投開票で行われた参議院選挙。ライフクロッシング誌の読者の皆様の多くがこの選挙の結果に背筋が凍る思いをしたのでは無いだろうか。

昨秋の衆院選で与党が過半数割れし、少数与党で迎えた通常国会は、参院選を控えていたこともあり、荒れることもなく平穏に閉会し選挙戦に突入した。参院選直前に行われた都議会議員選挙で自民党が敗北し、裏金問題に端を発した自民党離れは止まっておらず、参院選でも自民党が苦戦することは予想が出来た。

しかし、その受け皿として参政党が浮上してくると、この時点で予測できた人はひとりもいないのではないだろうか。

ある日突然、世の空気がガラッと変わった。

参院選を前に各党が公約を発表したが、表現や具体的な中身の違いはあるにせよ、ほぼ全ての政党が物価高対策を第一に掲げていた。そして、消費税についてほぼ全ての政党が何らかの形での引き下げを訴えた。自民党内からも消費税減税の声が出るなど主要政党の違いが分からなくなってしまった。

そうした中で、多くの国民の心に刺さったのが「日本人ファースト」というキャッチコピーだ。はっきり言って、このコピーだけだと何のことだかさっぱり分からない。

しかし、留学生や外国人労働者に加えて訪日外国人も増加し、慣習の違いなどから漠然とした不安を抱えている多くの国民の心を掴んだのだろう。

外国人だろうが日本人だろうが罪を犯したら厳しく取り締まれば良いのであって、外国人だとの理由だけ差別してはいけないという真っ当な主張が通用しない程、外国人を露骨に嫌悪する日本人が多いことに愕然とした人は少なくないだろう。

参院選の結果はご承知の通り、比例区において参政党が野党で最も票を得て14議席を獲得することになった。参議院の任期は6年間だ。6年間この議席数が変わらないと考えると恐ろしさを感じる。

参政党の演説に集う聴衆～オレンジは参政党カラー。写真の白枠は熱弁を奮う神谷代表

衆議院で既に排外主義的質問が繰り広げられるようになっているが、良識の府である参議院までもヘイトスピーチの嵐になるのかと思うとげんなりしてしまう。

このような国会の構成になった中で野党第一党である立憲民主党の役割は非常に大きいと考える。選挙期間の後半になって野田代表が「排外主義には与しない、人権を第一に考える」という趣旨の動画をSNSで投稿し、街頭でもその趣旨の演説を行ったのは評価するが、今後の国会活動の中で入管行政や福祉政策などで外国人を排除するような発言をする議員が出ることがないよう党内で政策のすり合わせをしっかりやってもらいたいものである。

小選挙区制が導入されて以降、衆議院議員は選挙で過半数の支持を集めなくてはならないために世論に迎合しがちだ。排外主義の流れが強まる中で外国人に対して厳しめの発言をした方が自身の選挙に有利だと判断をする議員が出ないでくれることを願うばかりである。

選挙において好き勝手やるNHK党などを放置してきた結果、選挙運動にかこつけてヘイト演説を公然と行う者が増えてしまった。参政党候補の演説も相当酷いものであったことはご承知の通りだ。

これまでゲリラ的におこなわれていたヘイト活動が選挙という公的な場で行っても恥ずかしくないという風潮になっていることに危機感を持たねばならない。

この秋に予定されている川崎市長選挙に被差別部落の地名をウェブ掲載した出版社「示現舎」の代表宮部龍彦氏が無所属で立候補すること表明した。数年前だったら、流石に選挙に出るまではしなかっただろうが、心理的な壁を取っ払うことが出来る風潮になっているということなのだろう。

このような人権を軽んじる排外主義、差別主義の流れを止めるべく、立憲野党の国会議員には世論に流されることなく、人権ファーストの活動を貫いてもらいたいものである。

私たち国民も憲法第十二条の「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない」という規定を胸に刻んで努力を重ねていこうではないか。

自民党の憲法改正草案でも驚いたが、参政党の憲法草案にはさらに強い危うさを感じる。ぜひネットなどで一度目を通し、その危険性を多くの人に伝えてもらいたい。

初鹿明博プロフィール～1969年東京生まれ。東大法卒、1997年旧民主党から江戸川区選出・東京都議２期、2009年自民党島村宣伸氏を破って初当選、３期務める。17年枝野幸男が立ち上げた立憲民主党6名の設立届けに名を連ねる。20年議員辞職。反原発、朝鮮問題に造詣深く関連した運動を続けている。